

編纂の進捗状況

中川和明

はじめに

二〇一一年度から、早稲田大学百五十年史の編纂状況についての報告を『早稲田大学史記要』に掲載していくことになった。そこで、前回（『早稲田大学史記要』第四三巻）では、二〇一一年の一〇月末までの進捗状況について記したのである。第二回目にあたる本稿では、引き続き、昨年一月から二〇一二年一〇月末までの進捗状況について説明していくことにする。なお、早稲田大学百五十年史に随伴する早稲田人名データベースや写真データベースの作成状況については、本記要の他の頁に詳しい記述があるので、そちらを参照していただきたい。

一 編纂委員会・編纂専門委員会・ワーキンググループ

(一) 二〇一一年度早稲田大学百五十年史編纂委員会(第一回)

二〇一一年一月九日、二六号館三階第三〇一号会議室(二六時三〇分～二七時三〇分)において百五十年史編纂委員会が開催された。出席者一名で、欠席者八名である。この編纂委員会については、既に前回の『早稲田大学史記要』第四三号の大日方所長の巻頭文『「百五十年史」と早稲田大学の確立期』において説明がなされているので、ここでは簡単に振り返るにとどめたい。

まず、協議事項は次の通りである。

一、編纂の基本方針に関する件

① 編纂準備委員会報告を踏まえ、② 新しい時代に対応した新しい年史を目指し、③ 大学史資料センターの機能を強化しながら進めることが承認された。

二、百五十年史および関係出版物の構成に関する件

内容区分は、

第一卷 創立～戦前期(専門学校令下の早稲田)

第二卷 戦後～一九九〇年頃(創立百周年事業まで)

第三卷 一九九〇年頃以降

とし、部局・箇所については本編の中で扱うことなどが承認された。

三、資料収集に関する件

①本部関係資料、②学部・箇所関係資料、③校地・建築関係資料、④個人資料などを収集するとともに、⑤ヒアリングのための準備をすることが承認された。

四、編纂日程に関する件

二〇一一年から二〇三二年までのおおよその編纂日程が確認された。すなわち、年表風に示すと次のようになる。

二〇一一年～一四年 編纂の準備。

二〇一五～一九年 第一巻の執筆・編集。第二巻以降の準備。

二〇二〇年 第一巻の校正・刊行。第二巻の執筆・編集に着手。

二〇二一～二五年 第三巻の準備。

二〇二六年 第二巻の校正・刊行。第三巻の執筆・編集に着手。

二〇二九年 学生向け冊子・写真集・DVD等の編集に着手。

二〇三二年 第三巻の校正・刊行。学生向け冊子・写真集・DVD等刊行。

五、専門委員の委嘱に関する件

新たに真辺将之（文学術院准教授）を委嘱することが承認された。

次に、報告事項に移り、早稲田大学百五十年史編纂委員会設置要綱の一部改正の件や、早稲田人名データベース・写真データベースの作成状況についての説明がなされた。なお、大日方委員から早稲田人名データベースの第一次候補分について、意見を寄せていただきたい旨の依頼があった。

(二)二〇一一年度早稲田大学百五十年史編纂専門委員会(第三回)

年が明けて、二〇一二年二月一日(二時〇〇分～三時四〇分)に、一二〇号館五F事務所において二〇一一年度早稲田大学百五十年史編纂専門委員会(第三回)が開催された。出席者は、浅古弘、沖清豪、真辺将之、大日方純夫の四名で、議事に先立ち新しく選任された真辺将之委員の紹介がなされた。

まず、協議事項は次の通りである。

一、資料調査の件

百年史で扱われていない百五十年史第三巻に関する資料の収集・整理を優先的にすすめる旨の説明があり了承された。該当する主な資料は次の通りである。

①自己点検・評価報告書

可能であれば冊子体のものを集めること。教務部が所蔵しているはずである。これの元になった資料も収集すること。

②設置基準大綱化(一九九一年)対応関係資料

本部(教務部)側の対応関係資料、各学部のカリキュラム改編関係などについて確認・調査する旨の説明があった。また、委員から各学部のカリキュラム改編については、設置基準大綱化の影響なのか、それともそれ以外の要因によるものなのか、吟味が必要であるとの意見も出された。

③大学機構関係、学部・大学院関係など

学術院設置関係資料を確認・調査する。従来型の大学院の改革のほかとくに専門職大学院、独立大学院のような新たな型の大学院の設置に関する資料を確認・調査する。また、学部関係では、第一・第二文学部と理工学部

が大きく改編されているので、重点的に確認・調査する。さらに、研究センター・附置研究所関係の資料を確認・調査する。委員から、設置関係だけではなく、その後の展開に関する資料についても確認・調査することが必要である旨の意見が出された。

④ 学校・附属・系属関係

附属・系属関係資料の確認・調査を図る旨、関係者の座談会を開いて話を聞く旨の説明があり、了承された。

⑤ 施設・建設関係

キャンパス企画部に問い合わせ、施設・建設関係資料の確認・調査を図る旨の説明があり、了承された。

⑥ その他

他大学との関係（例えば東京女子医科大学との関係など）について調査を図る旨の説明があり、了承された。

二、聞き取り調査の件

第三巻編纂準備のためのヒアリングの必要性について説明があり、了承された。具体的な段取りについては、大日方委員長と真辺委員が決めることが了承された。また、各委員会からヒアリング結果を裏付ける証拠がない場合、どのように活用できるのか、などの意見も出された。

三、構想・構成の件

専門委員会の下にワーキンググループ（メンバーは大日方委員長・真辺委員と、事務局の檜皮・伊東・中川の計五名）を作って、①百五十年史のコンセプト、②百年史と百五十年史第一巻・第二巻との対応関係の洗い直し、③百五十年史第三巻の骨組み、などの検討を行い、次回の編纂専門委員会に提案することが説明され、了承された。

四、その他

委員から、西原―小山総長時代の全学審の議事録が CAMPUS NOW に掲載されていたが、会議の記録はテープにとっているはずであり、そのテープの確認・調査が必要である旨の意見があった。

また、報告事項は次の通りである。

一、早稲田人名データベースの件

担当者から、予定していた一〇〇人のうち最初に五〇人分を作成し、演劇博物館のサーバを借りてアップしていく計画である旨、報告があった。

二、理事会・評議員会・維持員会資料の目録化の件

担当者から、案件リストと添付資料との対応関係を調査中である旨、および回収資料の調査が必要である旨、報告があった。また、委員から本部にある昭和五七年以降の資料もデータベース化するため、法人課との折衝が必要である旨の意見が出された。

三、写真データベースの件

担当者から、広報課より移管された戦後の写真のデータベース化の進捗状況について報告があった。また、委員から、教職員の肖像、学費学館闘争、来校著名人の写真などの扱いに問題が残っている旨の意見が出された。

四、作業用年表作成の件

担当者から、百五十年史編纂の予備作業として作業用年表を作成中である旨の報告があった。作業用年表は総長別にそれぞれの時期の重要事項を年表に記入していくといった方法で作り始めている。これらを基に、百五十年史の柱立が出来ていくはずである。

(三) 『百五十年史』ワーキンググループの発足

先の編纂専門委員会の際に、専門委員会の下にワーキンググループを設けることが決まったことはすでに述べた。二〇一二年一〇月二四日(九時三〇分～一時間三〇分)、一二〇号館五F事務所において『百五十年史』ワーキンググループが開かれた。出席者は大日方委員長・真辺委員の二人と事務局である。協議事項は、①『百五十年史』の構想・構成、②資料調査・収集、③聞き取り調査の三件であった。次いで、報告事項は、①早稲田人名データベース、②理事会・評議員会・維持員会資料目録化、③写真データベース、④作業用年表の作成の四件であった。新しく嘱任された真辺委員と、最近の百五十年史編纂準備の状況についての情報交換もなされたのである。このワーキンググループは、一月一四日に開催される編纂専門委員会の準備を兼ねたものである。本年一月二一日には二〇一二年度の編纂委員会が開催される予定である。

二 大学史資料センター保管の理事会・評議員会・維持員会資料の目録化作業

先に述べた二〇一一年度早稲田大学百五十年史編纂専門委員会(第三回)の報告事項にあった理事会・評議員会・維持員会資料目録化のその後の進捗状況について、ここで触れておきたい。大学史資料センターで一時的に保管しているものは、

①理事会資料

数量 一三六冊(製本一三四、仮綴二)

表題 『理事会決議録』、『理事会要録』、『理事会記録』

年代 大正一〇年一月～昭和五七年度

② 評議員会資料

数量 九〇冊（製本九〇）

表題 『評議員会決議録』、『評議員会記録』

年代 昭和二六年度～同五七年度

③ 維持員会資料

数量 一八冊（製本一五、仮綴三）

表題 『維持員会決議録』、『維持員会決議書綴』、『維持員会議事録』、『維持員会々議録』、『維持員会報告』、『維持員会要録』、『維持員会通知及報告書綴』、『維持員会記録』

年代 明治四〇年四月～昭和二五年度

である。これらの内、決議録は他の記録に含まれているため、それ以外のものを目録化しているのである。①については、案件名を入力済みで、只今、添付資料名を追加している途中である。この添付資料名の入力の際、教員を中心に人名を適宜、「」で追加して検索の便宜を図っている。新規職任・海外出張・叙勲・死亡等の場合に、人名を補ったのである。②は案件名のみ入力済みで、③については案件名を入力している途中である。これらの目録は、百五十年史第二巻の編纂の際に役立つものになるはずである。なお、大学史資料センターで保管している分は本部資料の一部にすぎないが、その他の資料も目録化すればたいへん便利になるはずである。

三 早大全教員の氏名を把握すること

東京専門学校・早稲田大学の全教員の氏名を遺漏なく把握することは、意外に難しい。これは百年史段階からの懸案事項の一つであったように記憶している。以前、大学史編集所時代に教務課移管の大学文書を目録化していた頃から気になっていたことなので、ここで一言触れておくことにしたい。公刊された「教員就退任および担当科目」のリストをあげれば、

- ① 「講師就退任および担当科目（明治十五年十月～三十五年八月）」（『早稲田大学百年史』第一卷一〇三〇～一〇四一頁）
- ② 「教員就退任および担当科目（明治三十五年九月～大正九年三月）」（『早稲田大学百年史』第二卷一一八三～一二〇六頁）
- ③ 「教員就退任および担当科目（大正九年四月～昭和二十四年三月）」（『早稲田大学百年史』第四卷八二二～八八七頁）
- ④ 『早稲田大学 教員就退任および担当科目（一九四九年四月～一九八三年三月）」（『早稲田大学大学史資料センター編集・発行、二〇〇二年四月）

となる。かなりの労作であるが、教員の氏名がこれらのリストから漏れている場合がある。全教員を把握しておくこと¹⁾によって、早大教員の全貌を多角的に解明する道が開かれるはずである。将来の大学アーカイブにとっても重要なことであると思われる。

おわりに

以上、最近一年間（二〇一一年一月から二〇二二年一月末まで）の進捗状況について述べてきた。

特に、百五十年史の全体構成が固まったことが大きな前進であった。これによって完成した姿をイメージしやすくなったはずである。百年史が全八巻であったのに対して、百五十年史は全三巻である。全体の頁数は百年史に比べてかなり少なくなるとみられる。しかし、密度を高めるとともに、早稲田人名データベースや写真データベースをはじめ周辺部分を広くすることは可能なのである。

新しく委嘱された真辺委員は、以前、大学史資料センターに勤めていたことがあり、百五十年史の準備に深く関与してきた。『東京専門学校の研究「学問の独立」の具体相と「早稲田憲法草案」』（早稲田大学出版部、二〇一〇年一月）の著者でもあり、適任といえる。氏は三十代であり、百五十年史の完結まで力を注いでもらえるものと強く期待されているのである。

新しくワーキンググループが発足した。編纂委員会、編纂専門委員会、ワーキンググループの各段階が実際に活動を開始したのである。編纂に向けた準備が着々と進んでいるといえよう。

二〇一二年度、大学史資料センターでは、現役の教職員を対象に百年史の残部を頒布したが、かなりの反響があった。『早稲田ウィークリー』に連載されている「早稲田に歴史あり」も好評のようである。自校史に対する潜在的な関心の高さが窺われるであろう。百五十年史の完結を待ち遠しい方もおられるのではないか。

ある人が、理想的な歴史書について、「専門的でありながらわかりやすく、包括的でありながら、細部を描き、制

度を書きながら、その中で生きた人物の顔まで見える⁽²⁾ものと述べたという。しばし考えさせられたが、校史の場合も同様なのではないか。百五十年史がそのようなものになるか否かは、今後の準備にかかっているように思われる。

註

(1) 「教員就退任および担当科目」を見ていると、思いもよらぬ著名人が教壇に立っていたことに気付くのである。例えば、二〇〇二年にノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊が昭和四〇年度の後期から一年間、非常勤講師として理工学部で物理学の教鞭をとっていたのである。

(2) 松方冬子『オランダ風説書』（中公新書二〇四七、中央公論新社、二〇一〇年三月）二〇四頁のあとがきを参照。